



障害のある人のスポーツへの多様な参加を支援するために

障害のある人のスポーツ参加支援推進委員会

第10回 作業療法士による障害者スポーツ支援

会員のなかには、東京パラリンピックが注目され始める以前から、長年にわたって障害者スポーツ支援に取り組んでこられた方が多くいる。職場で業務の一環として利用者の支援を行っている方もいれば、スポーツに対する理解や支援が乏しいなかで自らネットワークを構築し、地域での活動の土壌を固めて障害者チームやクラブを立ち上げた方も多く、委員会活動を通して、作業療法士による多様な関わり方が垣間見えてきた。障害者スポーツの支援のかたちや考え方に正解はなく、一言で言い表すことは難しい。本誌では、障害者スポーツに携わる会員2名の活動エピソードを交えながら、「作業療法士による障害者スポーツ支援」について考える。

〇那須野利喜氏（栃木県）

学生時代に障がい者スポーツ指導員（初級）を取得。第15回全国障害者スポーツ大会（2015 紀の国わかやま大会）で陸上競技の介助員の代替要員として参加以降、栃木県選手団役員兼介助員として同大会に毎年参加。2020年からは栃木県知的バスケットボールチーム（全国障害者スポーツ大会栃木県強化選手）トレーナーと特定非営利活動法人栃木県障害者スポーツ指導者協議会事務局事務局長に就く。栃木県作業療法士会の事業部の部員としても活動し、栃木県障害者スポーツ協会との窓口の役割を担う。

〇江川倫子氏（島根県）

所属先が精神・発達障害がある利用者に柔道療法を取り入れていたことが、柔道に関わることになったきっかけ。週に2回の柔道療法（稽古）を認知行動療法の一つであるSST（Social Skills Training：社会生活技能訓練）として実践している点が特徴。県内では知的障害者を対象としたスペシャルオリンピックス[※]の柔道プログラムが、松江市、出雲市、江津市、浜田市の4会場で実施されており、浜田会場で月に2回、ボランティアとして参加。

※スペシャルオリンピックスは、知的・発達障害のある人の自立や社会参加を目的としたスポーツプログラムや競技会を提供する国際的なスポーツ組織

活動の経緯

那須野氏は障害者スポーツに長年携わる職場の同僚に声をかけられ、江川氏は職場で業務として取り組んでいたことで、障害者スポーツに関わることになったという。お二人の場合は「職場つながりで」という点が共通していたが、一般的には必ずしもそうとは限らない。障害者スポーツに関わるきっかけは、業務の一環であったり、業務とは切り離れたプライベートでの依頼であったりと個々人で異なる。なかには、知人友人からの紹介、研修会やイベントなどへの参加、SNS上での交流など、多岐にわたる。

作業療法士としての強み

江川氏は「個人競技である柔道は作業として強度の段階付けが容易で、取り入れやすい。挨拶を学び、楽しみながら人間的にも成長できるよう支援することを心掛けている」と話す。スポーツの場面においても作業分析を通じて対象者が適切な難易度で作業を遂行できるよう支援し、さらに柔道を通して礼儀や道徳を学べる機会を創出しており、作業療法の柔軟性と多面性が垣間見える。

那須野氏は「初めてお会いする障害者スポーツ関係者や支援対象の方々への自己紹介の際に、作業療

法士であることを伝え、どんな資格かではなく、何ができるのか、何をしてくれる人なのかを話すことが重要なのだと思う」と話す。作業療法士としての知識・経験を活かした技術指導やコーチング以外に、練習の準備、片付け、掃除などの運営サポート、選手の着替え、移動などの介助支援を通して障害者スポーツを支援している作業療法士が多いのではないだろうか。作業療法士が支援できる場面は多岐にわたる事実を、対象者、他の支援者、障害者スポーツ団体にも知ってもらうことが必要である。

都道府県の窓口

都道府県・政令指定都市には「障害（障がい）者スポーツ協会」「障害（障がい）者スポーツ指導者協議会」が設置されている。那須野氏のようにこれら協会・協議会で活動し、所属士会の担当窓口となっている会員もいる。本会が都道府県・政令指定都市障がい者スポーツ協会を対象に実施した調査では、約9割の障害者スポーツ協会が「(都道府県作業療法士会と)連携するためのマンパワー・時間・予算的余裕がない」と回答したことから、障害者スポーツ・作業療法士の両方の団体に属していることは非常に貴重である。江川氏からは同じ地域で障害者スポーツ活動に取り組む作業療法士と出会う機会が少なく、情報交換ができないとの声もいただいた。

「作業療法士と障害者スポーツ」の可能性の拡大に向けて

障害者スポーツに関わる作業療法士の可能性について両氏からコメントをいただいた。

(那須野氏) 栃木県障害者スポーツ協会と栃木県作業療法士会との連携の第一歩として、精神障害者バレーボールチームへ作業療法士を派遣した。チームスタッフへ選手との関わり方についてアドバイスしたり、選手からの相談や選手が通院する医療機関(精神科病院、デイ・ケア等の医療スタッフ)との連絡調整役を作業療法士が担うことで、「地域スポーツ」と「医療」のつながりができることが期待できる。障害者スポーツへ関わるためには、スポーツ関係者に作業療法士に何ができるのかを周知していく

ことが課題であり、障害者スポーツへ興味を持つ作業療法士と障害者スポーツ団体とのマッチングが行えれば、作業療法士が活躍できる領域の拡大につながると考える。

(江川氏) 作業が引き出す「生きる力」を一番実感し、よく知っているのが作業療法士である。スポーツをする機会は誰にも平等にあるべきで、スポーツの楽しさと素晴らしさを感じ、人生をより充実したものにしてほしい。当初は少人数での活動だったが、人が人を呼び、今は参加者が増えてきている一方で、島根県では特に場が足りないと感じる。障害の有無に関係なく、参加者全員が楽しめるように環境を整備するのは作業療法士の得意な考え方であり、スポーツを通じて支援を行っている作業療法士はたくさんいると思う。コロナ禍で直接会って情報交換を行うことは難しいが、SNSなどで活動の発信を続け、それが誰かに届いて手を取り合うことができることを願っている。

最後に、当委員会が課題として考えることは大きく分けて3点ある。①今年度はCOVID-19感染拡大に対する懸念から、スポーツ関連のイベント・研修会の開催が当委員会および他団体でも十分にできていないが、作業療法士に対して障害者スポーツについて知る・学ぶ・取り組む機会や情報を十分に提供すること。②「障害者スポーツに対する作業療法(士)の可能性」を学術的な成果として提示すること。③身近なところで障害者スポーツについて学べる場をもっと増やすこと。

一方、第54回日本作業療法学会では、シンポジウム「作業の魅力・作業の力～当事者から作業療法士に期待すること～」にパラリンピアンやパラリンピック出場を目指すシンポジストが登壇したり、障害者スポーツ関連の口頭・ポスター発表も複数なされていた。これは一つの大きな進歩と感じる。コロナ禍においては、課題を改善するには難しい面もあるが、同じ環境や同じ対象者と関わっている人と意見交換をしたいという会員・士会の希望へも何らかのかたちで応えていく必要があると考えている。